海外から見る日本

國立清華大學化学系教授 磯部 稔
Minoru Isobe

筆者が台湾に来て四年半になる。日台を頻繁に往来し、また中国や多くの国々を訪問してきたこの機会に「海外から見る日本」について考えてみたい。親日派の多い台湾から見ると、ちょっと気になることが多いわが祖国。政治的な話は別にして、草の根の視点からすると、日本と台湾には文化・人情・価値観などの共通点が少なくないが、どこが違うか。その一例として、週末に多くの市民家族が集う竹北市の公園でのこと。駐在日本人と台湾人の母親達がともに幼児を遊ばせている。自分の子供を他の子供たちにいかにとけ込ませるか、共通の親心だ。日本人の親が発する言葉は、禁止やしつけ(他人への配慮)などが大半であるのに対し、台湾人の親達は子供がもっと積極的自由に行動するよう仕向ける。毎夜8時半頃には家の周りのあちこちで交通渋滞が起きる。近くの米語塾や学習塾が終了し、帰宅する子供を親が車で迎えにくる時間だ。子供達も明るい顔で勉強している。こうした台湾流の子供教育が、成長とともにどう展開するか興味をそそられるところだ。時が経ち大学生や大学院生となるころには成人として違和感はほとんどない。台湾国立清華大学のキャンパスに目を転じてみよう。学生は実によく勉強し文献を読み、課題の理解を自力で深めようとする。一日に有機合成実験にあてる時間を、強いて名古屋大の学生と比べると、後者がかなり長い。教員は、皆PI(Principal Investigator)として独立している。アメリカの大学に近い仕組みは、ほとんどの教員が米国で学位を得、ポスドクを経験しているためであろう。学生に博士学位を与える過程にも違いがある。博士課程を3年ではなく標準4年とし、全員が奨学金の給付を受ける。この1年の差により、学位取得見込みのある学生を選び、4年次に6カ月海外へ交換留学生として派遣したり、国際会議に出席する機会を与えたり、かなりの余裕ができる。彼らは幼年時から盛んな英語教育を受け実践的語学力をもつが、それに磨きをかけた豊かな国際感覚を身につけて帰ってくる。博士の質は高く、ポスドク・就職などの人生にも大きな自信となる。話は変わるが、台湾には「日本のような就活」がない。その理由は徴兵制度にもあるようだ。学部・修士・あるいは博士課

程修了後のいずれかを選び、11カ月を国軍兵卒として訓練を受け、その間に休暇を得て将来の留学や就職の準備を進める。女子には兵役義務はないが、学生時に得た成績・点数は就職・転職さらに縁談にまで影響し一生ついて回る。何事にも試験と得点がものをいう。

アジアの文化・経済的な発展と、日本との関係について振り返ってみる。今から10-15年ほど前、GDPをはじめ多分野にわたり総量的な位置を、発展著しい中国が日本と交替する兆しが顕著な時期であった。アジアの時代といわれたその頃、筆者はIUPACのOrganic and Biomolecular Division Presidentを4年間つとめ、多くのデータを眼前にした。この活動がなければ、筆者自身も日本は質的に優位でありまだ当分アジア第一位を保ち続けるという間違った考えを持ったに違いない。しかし2004年を境にして、Chemical Abstractによる論文発表総数も日中が交替し、中国から投稿される注目論文数も増え続けている。有機化学分野では、2002年に始まった日中有機化学若手研究者会議や、2005年開始のACP(JSPSアジア拠点プログラム)による最先端有機化学プロジェクト、同時期のアジアジャーナル創刊など、急速にアジアの有機化学研究者間での国際交流が深まった。現在では研究者個々の顔がよく見える成熟した形となり、時代は大きく変わった。2013年年頭にあたり、日本とアジアの現状・将来についての考え方を改めている人は多数を占めるに違いない。こうした中で日本の国際的地位を高めるため発想の転換を提言したい。科学者育成の目標を広げて、「科学・技術だけでなく文化的国際競争力とを一体化した実力をつけ、国際的な主張のできる人材育成を目指す」という時代に転じなければならない。「科学・技術」に見合う「文化・技術(語学・コンピュータ・国際性・人柄)」を併せ持つ人材を日本内外で高く評価し重用することが急務である。「科学・技術」と「文化・技術」の一体育成システムを構築し効果的に運用すれば、国際感覚を持つ日本の若者が増加しその将来を明るく照らすものと信ずる。

(2012年10月23日受理)